

創造的な読み手を育てる連句の指導 (1)

— 国語教材としての連句の可能性を探る —

宗我部 義 則

1. 研究の動機

「花をもたせる」「～の挙げ句」など、連歌・俳諧から生まれた言葉も多い。しかし、中世の連歌の伝統を受け継ぎながら江戸時代に隆盛をみた俳諧（連句）が、近代に入ってほとんど行われなくなってしまったのは、子規による批判の影響が強いといわれている。子規は「芭蕉雑談」(M 28)の中で、「俳諧に文学的要素がないわけではないが、その文学的要素を論じるのには発句をもって足りる。連俳では変化を貴ぶが、それは一貫した秩序と統一の中の変化ではなく全く前後の関連のない変化である。」という考えに基づいて、「発句は文学なり、連句は文学に非ず」と結論したのであった。

しかし例えば「発句は門人の中にも予におとらぬ句する人多し。俳諧においては老翁が骨髓」(『宇陀法師』森川許六)と芭蕉自身が語るとおり、実は芭蕉の文芸の中心は発句よりもむしろ俳諧（連句）にあることが、戦後の芭蕉研究の成果の一つとして明らかになったことなどを背景に、最近ようやく連句が再評価されてきたようである。そこで、国語教育の面からも「連句の教材としての価値」を考えてみたいと思い、本校の2・3年生を対象に連句の授業実践を試みた。

2. 教材としての連句の魅力（教材化のための仮説として）

(1) 連句の概要（形式と付け運び）

“連句”は、江戸時代まで一般に俳諧（俳諧之連歌）と呼ばれていたが、子規の俳諧革新運動を経て、虚子が「俳諧の発句といふべきを略して俳句といふ如く、俳諧の連句といふべきを略して連句といふ方が、俳句に対して截然と区劃が立つやうに覚えられる」(「ホトトギス」M 37)と提唱したことにより、今日では「俳諧（之連歌）＝連句」と呼ばれるようになった。

ここで「俳諧」というのは、「古今和歌集」に「俳諧歌」の部立があるように、高雅な和歌に対して、滑稽・諧謔なものとして区別されていたわけであるが、やがて正式連歌の余興として行われた滑稽味を中心にする連歌を俳諧之連歌というようになり、さらに単に俳諧と呼ばれるようになったのである（参考『連句辞典』東 明雅 他 東京堂出版）。一般に、室町時代の山崎宗鑑（『俳諧連歌抄（犬筑波集）』）・荒木田守武（『守武千句』）らが俳諧の始祖とされ、江戸時代に入って、松永貞徳らを中心にする貞門俳諧、西山宗因・井原西鶴らの活躍した談林俳諧を経て、芭蕉によって文芸として完成されたといわれている。

※ 今後この実践報告の中では、芭蕉ら古典作品も現代行われているものも「連句」という名称で使っていく。

資料1 (市中歌仙による連句紹介プリント)

二年生 学習資料

連句

元禄四年刊 獲菴所収

2年 組 ()

「市中は」の巻

表	裏	作者	定座
1 市中は物のにほひや夏の月	1 草むらに蛙こはがる夕まぐれ	野次 凡兆	芭蕉
2 あつしあつしと門々の声	2 道心の芽とりに行灯ゆりけす	芭蕉	芭蕉
3 一番草取りも果たさず穂に出て	3 道心のおこりは花のつぼむ時	芭蕉	芭蕉
4 灰うちたたたくうるめ一枚	4 能登の七尾の冬は住みうき	芭蕉	芭蕉
5 此筋は銀も見知らず不自由さよ	5 魚の骨しはぶる迄の老いを見て	芭蕉	芭蕉
6 たたとひやうしに長き脇指	6 待ち人入れし小御門の鍵子供	芭蕉	芭蕉
	7 湯殿は竹のすのこ侘しき	芭蕉	芭蕉
	8 ういきやうの裏を吹き落とす夕嵐	芭蕉	芭蕉
	9 僧ややさむく寺にかへるか	芭蕉	芭蕉
	10 さる引きの猿と世をふる秋の月	芭蕉	芭蕉
	12 年に一斗の地子はかる也	芭蕉	芭蕉
	1 五六本生木つけたる <small>みづたまり</small> 溜	芭蕉	芭蕉
	2 足袋ふみよごす黒ほこの道	芭蕉	芭蕉
	3 追ひたてて早き御馬の刀持ち	芭蕉	芭蕉
	4 でつちが荷なふ水こぼしけり	芭蕉	芭蕉
	5 戸障子もむしろがこひの売り屋敷	芭蕉	芭蕉
	6 てんじやうまもりいつか色づく	芭蕉	芭蕉
	7 こそこそと草鞋を作る月夜さし	芭蕉	芭蕉
	8 そのまにころび落ちたる <small>あは</small> 升落とし	芭蕉	芭蕉
	9 草ゆがみて蓋のあはぬ半櫃	芭蕉	芭蕉
	12 草庵に暫く居ては打ちやぶり	芭蕉	芭蕉
	1 さまざまに品かはりたる恋をして	芭蕉	芭蕉
	2 なに故ぞ粥すすするにも涙ぐみ	芭蕉	芭蕉
	3 御留守となれば広き板敷	芭蕉	芭蕉
	4 手のひらに風遣はする花のかけ	芭蕉	芭蕉
	6 かすみうごかぬ屋のねむたさ	芭蕉	芭蕉

発句 (客)
脇 (亭主)
第三
挨拶
返礼
転換

季の扱い
春秋 ≧ 3句以上続ける
夏冬 ≧ 2句以内で移る
雑 ≧ 無季の句

恋の句
一巻に1〜2カ所
原則は2句続ける

付け方の例
・前の場面を発展
・ムードだけ受け継ぐ
・全く逆に展開
・前の句を解釈
など、連想を働かせ、
できるだけ変化をもた
せるように工夫する。

タブー
・同じ言葉、字を使う
・前の前と同じ趣向
○ ○ ○ ○
○ × ×
○ ○ ○ ○
・同じ趣向ですつと
続ける
※変化が大切

名残の花 (爛漫の花を)
挙句 (めでたい気分で)
(名残の花はほして酔かきないまより)

① 連句の形式と懐紙式

資料1は、芭蕉の連句の中でも特に評価の高い「市中歌仙」(『猿蓑』元禄四 所収)を例として、生徒たちに連句の概要を説明したプリントである。

連句は長句(五七五)と短句(七七)を交互に連ねていくもので、これを百句つなげるものを「百韻」、三十六句つなげるものを三十六歌仙にちなんで「歌仙」と呼ぶ。本来、百韻が本式で歌仙は略式なのだが、芭蕉が歌仙形式を中心にとることで俳諧の文学性を高め蕉風俳諧を完成させていった後、今日に至るまで歌仙形式が中心に行われている。

連句の清書には奉書・鳥の子紙などの「懐紙」を用いた。これを横半切に折り、折り目を下にして右端を綴じるのだが、その最初の折紙を「初折」、以下「二の折」「三の折」、最後の折紙を「名残の折」と呼んだ。(百韻の場合四つの折に百句を分けて書いたのだが、歌仙では、初折と名残の折の二つのみとなる)そして歌仙の場合、初折の表面に六句・裏面に十二句、名残の折の表面に十二句・裏面に六句というように決められた句割りで清書するのである。現在ではノートやワープロ等での清書が多いようだし、もちろん授業ではノートやプリントに記録していくことになるだろうが、そうした場合でも「初表(初折の表)」「名残の裏」などの呼び習わしは一般に行われている。これは例えば「表六句(初折表の六句)では無常や恋などは詠んではいけない」といった約束ごとがあったり、全体の構成を高めるため折や面を一つの単位として展開を工夫するために必要があるのであろう。この約束ごとを式目と呼び、たとえば

・歌仙では必ず月の句を三つ、花の句を二つ詠む(月・花の定座)。

・一度春(秋)の句が出たら三句以上五句まで春(秋)の句を詠む。

などのように、細かな取り決めがある。これらは独立した句の集合体である連句作品に、全体で一つの作品であるという調和や、展開の変化による面白さを生み出すために決められているのである。ただしがんじがらめの掟というわけではなく、芭蕉なども「まづは大かたにて宜し」(=だいたいそれに準拠する程度でよい。『三冊子』)と言うように、その場に一座する人々の交流と興の盛り上がりの中で、裁量していけばよいとされている。授業で行うときには、この式目をどう設定するかが楽しいものになるかどうかの、工夫のしどころであろう。

② 連句の付け運び(付け合い)

発句が決まると、それに脇句を付け、脇句に第三を付けというように進めていくことになる。以下挙句まで、A句からの連想をB句に表現して付け、B句からの連想をC句に表現していくわけだが、このとき「A-B」の二句一章が作る世界と「B-C」が作る世界は全く違った世界になることが連句の「変化」でありその転換ぶりが味わいのおもしろさになる。例えば、次に示すのはこの「変化」の例としてよく取り上げられる芭蕉の連句作品の一部である。

A 桐の木高く月さゆる也 野坡

B 門しめてだまってねたる面白さ 芭蕉

C ひらふた金で表がへする 野坡 (『炭俵』「梅が香の巻」より)

この付合では、Aは「庭の桐の木を月が冴々とてらしている」という情景で、Bの芭蕉はそれを風流な隠者の住いとみて「一人しづかに月を眺めるのはなんとも趣がある」とその人の姿を付けたわけである。ところがCでは「Bの人物は何をよるこんでいるのか、それは実は拾ったお金

で暈の表替えをして、すがすがしい部屋で寝転がっているのだ」と、「A-B」で作られた風流な隠者は、ごく庶民的な人物へと変化する。ここではAとCの間には、何のつながりもないのである。(表替えをした人物の家の庭に桐の木があって……などとつなげて読む必要もない。) こうした変化の妙味と、それぞれの二句一章で作出す世界の情趣を味わい楽しむのが連句なのである。

(2) 教材化の視点(教材としての連句の魅力)

次に国語教材としての視点から、連句の魅力をとらえ直してみたい。

ご自身も俳句結社を主宰しつつ、国語科の学習に「物語俳句」など独創的な俳句指導を取り入れて来られた青木幹勇氏は、俳句の学習(指導)の価値として、次の十項目を指摘している。

- ① 俳句は短い。俳句にはリズムがある。これが、読みやすさ、覚えやすさ、そして、暗誦にもつながる。
- ② 俳句は短くて、読みやすいが、句意をとらえることは、かならずしも容易ではない。この抵抗も一つのメリット。
- ③ 俳句は詩である。俳句を読むこと、作ることによって詩感を養い、詩心を育てることができる。
- ④ 俳句表現には、ことばの省略、文脈の屈折が多い。これを理解や表現につなぐことができる。
- ⑤ 俳句の表現には、諸種の比喻や飛躍が多く用いられている。
- ⑥ 季語の理解と使用を契機に、季節と季節の動き、季節の動きから季感へと、関心を広げることができる。
- ⑦ 句の意味を理解したり趣を感じとるために、想像をはたかせ、連想をあしらって読むことが要求される。
- ⑧ 短詩型であること、季語その他の制約があるために、語を選び、省略をする。それが表現の飛躍や、屈折につながるなど、散文では学びにくいレトリックを学ぶことになる。
- ⑨ 理解や表現に即し、言語感覚を、具体的に養うことができる。
- ⑩ 俳句を作ることがきっかけになり、作文に不得意な子どもも、書けるようになる。

(『授業 俳句を読む、俳句を作る』青木幹勇 太郎次郎社 1992.6)

さすがに長い実践に基づいた整理のされ方で、俳句のみならず短歌などの短詩型文学の学習価値を言いつくしているように思う。そしてこれはそのまま連句にも当てはまるであろう。

では、連句を授業実践に取り入れようとした場合、どのようなアプローチが可能だろうか。

① 連句作品の鑑賞を中心にした授業

俳句はすでに国定教科書の時代から教科書教材として取り上げられているが、その授業は現在でもおおむね理解領域に比重がおかれる形になっていると思われる。教科書では小学六年生と中学三年生の時期に、近世から現代の著名な俳人の句を取り上げる形で採られ、句の情景や作者の心情などを豊かにイメージしながら一句を鑑賞していくことを目標とした授業が中心で、俳句の実作指導は発展学習的位置づけや、行事や国語の時間以外の生活の中で行われるのが一般的ではないだろうか。その可否はともかく、では連句の場合とは考えると、読み(鑑賞)を中心にした授業は難しいのではないかと思われた。

連句の鑑賞は、一句一句の解釈と鑑賞が基礎になる。この部分においては俳句の鑑賞とさほど

差はないだろう。その解釈と鑑賞をもとに、付合の鑑賞、つまり連想のねらい目(付け筋)を想像したり、二句が出会ったときに生み出される余情や新しい世界を味わったりするところに連句鑑賞の特徴でもある面白さがあると言えよう。山口誓子の連作・群作俳句や、茂吉の短歌の連作などの鑑賞も、一句(一首)で鑑賞するのはまた違った味わいがあるが、連句作品には一貫したテーマや思想はない。先にみた転じの意外性を楽しみ、つぎつぎに出現する場面・情景を自由に想像していく読みになる。

しかし、三十六句の歌仙をまるごと読もうとすると、教材選定がなかなか難しいのである。というよりまだこれがよいという作品がなかなか見つからないのである。これはもちろん私の勉強不足のせいなのだが、作品として評価の定まった古典連句作品は、当時の風俗・習慣や古典文学についての素養がないと解せない句も多く、また現代の作品でも、大人の知的遊戯という世界にあそぶ現代連句の面白さは中学生にとって難しいものとなってしまうそうである。このあたりが、連句が教科書などで取り上げられない大きな理由でもあるのだろう。

② 連句の実作

では、実作の指導はどうか。実は、ここにこそ連句を国語の授業に取り入れる価値があるのではないかと思うのである。

連句で付句を付けるということは、たとえば次のような過程といえるのではないか。

ア 前句の読み(理解・鑑賞)

- ・句意の理解、レトリックの理解
- ・場面や情景、ものごとを具体的にイメージする

イ 付句の創造(創作)

- ・連想や想像を広げ、とらえたイメージを拡充、深化する
- ・新しく創造されたイメージ(情景、ものごと)をことばに置き換える
- ・定型にあてはめるためにことばを取捨選択する

ウ 自分の読みと創造の結果としての作品の発表

つまり連句を巻くということは、前句の読みに主体的に関わって、ひとつの虚構世界を創り出し、それを受けて自分の中に作られた世界・イメージを付句に表現するという学習活動を常に繰り返していくことになると考えられるのである。これはまさに理解と表現の一体化そのものとも言えるのではないだろうか。しかもその過程で、俳句では短すぎてなかなか盛り込むことのできない人情の機微にふれたり、四季折々の季節感を反芻したりしながら、自分の中のことば・自分の語彙と立ち向かうことになるのである。

たとえば次の作品は、私立高校の受験中心日に、すでに附属高校に進路が決定している三年生女子を対象に試みた最初の作品である。授業ということではなく、受験期のほんの息抜きでもあったのだが、中学生の連句実作の魅力と可能性を十分に示してくれる作品である。

資料2 3年生による作品例

		国語「連句で遊ぼう」最優秀作品	
		「語らへば」の巻(十二韻)	
発句	語らへば友あり風も光けり	作者	季題
		雅辺	春/風光る
脇	皆の瞳の輝き忘れじ	山吹	(春)
第三	桜餅食めば心に花満ちて	桜女	春【花】
四	三日坊主のカロリー計算	とほる	雑
五	ハイレグの水着まとひて湘南へ	華奴	夏/水着
六	夕日の海に二人よりそふ	駒智	雑
七	夏の恋もみちとともに舞ひ落ちる	とほる	秋/紅葉
八	心に響く虫の音寂し	山吹	秋/虫
九	秋祭りほほえみ照らすお月さま	桜女	秋【月】
十	カラオケがなるおじさんの群れ	華奴	雑
十一	一すぢの足跡続く雪明かり	駒智	冬/雪
挙句	カレンダー買ふ街のにぎはひ	華奴	冬/暦買う

実際には五十分授業の枠を少しはみ出し、正味六十分程度で仕上げた作品である。高校生の実作はいくつか読んだことがある(例えば『「連句のすすめ」暉峻康隆・宇咲冬男 桐原書店』に、高校生対象の連句教室での実作が紹介されている)。しかし中学生にも作れるだろうか。そう思いながらの試みだったが、「桜餅食ればじゃ字余りだ。」「瓜食めば」ってのあったじゃない。」などと定型にするためにことばを探しながら、とても楽しそうに取り組む生徒たちの反応は、国語教室での連句指導の可能性を十分に実感させてくれた。そこであらためて二年生を対象に、

イメージ豊かに読み、虚構世界を創造する(読み→創作)活動を引き出す教材

として位置づけ、生徒たちの連句実作の様子をとおして教材化にあたっての課題を具体的なものにしていこうと考えた。

資料3 連句を読んでみよう

二年門組 山本達郎

連句を読んでみよう (「語らへば」の巻)

発句 語らへば友あり風も光けり
脇句 皆の暁の輝き忘れじ
山吹 (春)
山吹 (春)

第三 友と語りあえは風や光もかきや
皆の暁の輝き忘れじ
山吹 (春)
山吹 (春)

第三 桜餅を食めば心に花落ちて
桜餅を食めば心に花落ちて
山吹 (春)
山吹 (春)

第三 桜餅を食めば心に花落ちて
三日坊主のカロリー計算
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第四 三日坊主のカロリー計算
ハイレグの水着までひて湘南へ
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第四 三日坊主のカロリー計算
ハイレグの水着までひて湘南へ
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第五 ハイレグの水着までひて湘南へ
夕日の海に二人よりそふ
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第六 夕日の海に二人よりそふ
夏の恋もみちとともに舞い落ちる
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第七 夏の恋もみちとともに舞い落ちる
夏の恋もみちとともに舞い落ちる
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第七 夏の恋もみちとともに舞い落ちる
夏の恋もみちとともに舞い落ちる
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第八 心に響く虫の音寂し
秋祭りほほえみ照らすお月さま
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第九 秋祭りほほえみ照らすお月さま
秋祭りほほえみ照らすお月さま
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第九 秋祭りほほえみ照らすお月さま
秋祭りほほえみ照らすお月さま
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

○どんな連想で次の句が付いているか考えてみよう。

連句を読んでみよう (「語らへば」の巻)

発句 語らへば友あり風も光けり
脇句 皆の暁の輝き忘れじ
山吹 (春)
山吹 (春)

第三 友と語りあえは風や光もかきや
皆の暁の輝き忘れじ
山吹 (春)
山吹 (春)

第三 桜餅を食めば心に花落ちて
桜餅を食めば心に花落ちて
山吹 (春)
山吹 (春)

第三 桜餅を食めば心に花落ちて
三日坊主のカロリー計算
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第四 三日坊主のカロリー計算
ハイレグの水着までひて湘南へ
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第四 三日坊主のカロリー計算
ハイレグの水着までひて湘南へ
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第五 ハイレグの水着までひて湘南へ
夕日の海に二人よりそふ
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第六 夕日の海に二人よりそふ
夏の恋もみちとともに舞い落ちる
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第七 夏の恋もみちとともに舞い落ちる
夏の恋もみちとともに舞い落ちる
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第七 夏の恋もみちとともに舞い落ちる
夏の恋もみちとともに舞い落ちる
とほる
とほる
山吹 (春)
山吹 (春)

第八 心に響く虫の音寂し
秋祭りほほえみ照らすお月さま
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第九 秋祭りほほえみ照らすお月さま
秋祭りほほえみ照らすお月さま
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第九 秋祭りほほえみ照らすお月さま
秋祭りほほえみ照らすお月さま
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

第十一 秋祭りほほえみ照らすお月さま
カラオケがなるおじさんの群れ
山吹 (秋)
山吹 (秋)

○どんな連想で次の句が付いているか考えてみよう。

○どんな連想で次の句が付いているか考えてみよう。

柴田陽子

3. 実践報告 単元名「想像の翼を広げて— 連句を楽しもう —」

(1) 目標

- ① 連句という文芸について知り、実作を楽しむ。
- ② 表現に即して前句を読み味わい、想像を広げて付句を作る。
- ③ 話し合いを通して共同で一つの作品を仕上げる。

(※ 中学生による連句実作がどのように行われどんな付句をするのか試みながら、連句の教材としての価値を考える。)

(2) 指導の展開と主な指導内容

〈第1時〉 連句の紹介

○導入……「花をもたせる」「拳句の果て」「二の句がつけない」の語源

○連句とは(連句の概略) ・五七五と七七 ・連句は連想ゲーム

・3年生作品の付け筋をたどってみる

※ 導入では、「花をもたせる」「拳句の果て」などのことばを提示して、意味とそのことばが生まれた背景を紹介する中から、連歌・俳諧というものへ話題を向けた。生徒たちは例えば「花をもたせる」ということばは知っていても、実際に花束を贈ることだと思っていたりして、なかなか興味深く教師の話聞いていたようだ。

その後、3年生の作品(資料2)をプリントし、「連句とはどんな特徴のある文芸だと思うか気がついたことをあげよ」という指示した。生徒たちはすぐに、五七五/七七の繰り返してあること、季語の入っている句とない句があること、たくさん的人数でつくること、つぎつぎに話が変わっていくこと、など連句の概略に気づいた。その後、「どんな想像をしてこんな付句がついたのか」想像してみようとして投げかけ、あれこれ想像してときには笑い転げながら、3年生作品を味わった(→資料3)。その中で、「連句では次々に変化していくことが大切で、一貫した物語にならなくてよいこと(むしろ同じストーリーが3句続いてはいけないこと)」を説明し、次回から挑戦してみることを予告した。

〈第2時〉

○式目の設定 →資料1「市中」歌仙のプリントを配布

○「座」を組む →三・四人一組でグループを作り、俳号を考える。

○発句の提示、脇句を作ってみる

※ 実際の連句の式目は非常に厳しく、また細かいので、これをそのまま中学生の授業連句にあてはめることはできない。どのような式目を作るかは、連衆(生徒たち)の練度に応じて変えていけばよいであろう。今回は全く初めてだったので、資料1の「季の扱い・恋の句・タブー」に示した三点を約束として確認し、製作用のプリント(資料5)のように季節の位置と、月・花・恋・雪の定座を定めて、そこではそれぞれの題(月など)が出てくる句を作るように指示した。恋句を付けることの明示は、生徒たちの意欲をかき立てる。

座を組み、気分を盛り上げるために俳号を決めさせたところで、発句の案を提示した。今回使ったのは次の三句である。

① 卒業の面をあげてうたふなり	草野梨迂子
② 春の雲ながめてをればうごきけり	日野 草城
③ 春の日や風より軽き服を買う	秋山 恵子
『カラー図説日本大歳時記』講談社より	

発句の選定にあたっては、

- ・現代俳人の作品であること
- ・句意がわかりやすく、イメージを作りやすいもの
- ・季節感があう当季の句であること

という点に注意して選ぶようにした。授業では、それぞれの句を音読した後、歴史的仮名遣いの部分など句意をとらえる上で抵抗になりそうな部分について確認した。そして発句をひとつ選び、句の場面や情景を想像させ、そこから連想したイメージを七七にまとめて短冊に脇句を作らせた。全員が作り終えたところで集めて、教師が評価しながらそれぞれの発句の脇を治定（選定）することにより、生徒たちに次からの句を自分たちですすめていく練習とした。（→資料4 脇句を付ける 参照）

〈第3・4時〉脇起こし十二韻連句を巻く

※ 実際に付句をすすめる段階で指示、アドバイスしたのは、主に

- ・イメージをたっぷり膨らませて読み、作ろう。
- ・合作可（→原案の発想者を作者とする）
- ・字余り、字足らずも可（後で推敲するので次へすすめてよい）

の三点であった。合作可というのは、中学生に句を作らせる上で効果的であった。彼らは、たいへん想像力豊かで、連想も次々と浮かぶが、五七五・七七の定型にあてはめるのに苦労する。そこで、「こんな場面を作りたい」「こんなふうに変化させてはどうか」とアイデアを出し、それをグループのメンバーで定型化する方法を許可したのである。これにより話し合いの中で語彙を補いあい、ことばを磨きながら、しかも楽しく気楽に句作を進めることができるのである。生徒たちの製作中は机間指導を中心にすすめ、付け悩んでいるグループには、

- ・前句からどんな情景を読み取ったか。どんなふうに解釈を変えるのか。
- ・どんな付句を考えているかを聞き、定型化のためのことばをヒントとして与える。

などの指導を行った。

〈第5時〉推敲とまとめ・披講

- 作品の推敲
- まとめ（付け筋の自解）
- 披講（作品発表）
- 感想のまとめ
- 「連衆心」ということ

※ 十二句付け終わったグループは、

- ・できる限り字余り、字足らずは排し、定型にあてはまること。
- ・漢字、語句など、同じ言葉や同じ趣向が繰り返されている部分はないか。

を中心に推敲をさせ、その後プリント(資料6)に付け筋の自解をまとめさせた。前句のどの部分をどのようにとらえて付句を考えたのか、生徒たちの製作の過程を少しでも知るためであるが、同時に評価ための手段になる。

その後、グループごとに作者自身が自分の句をリレー式に読み上げて披講させた。一句一句読み上げられるたびにまわりの生徒が反応し、盛り上がったが、特に恋の句の場面ではお互いの普段見せない一面が見られたりして、おおいに盛り上がった。

最後に「連詩の愉しみ」(岩波新書156)で紹介されている「西洋の諸々の信条に反する製作行為である連歌は、われわれにとっては一つの試練、小さな煉獄だった。」というオクタヴィオ・パスという詩人の言葉を紹介し、「他人の前で読み作ったものをすぐさま人にさらす連句という詩の製作方法が西洋の詩人にたいへん興味をもたれている。こういうやり方がどれだけ勇気があることかはすでに体験したはず。心を開き合い、通わせあって一つの作品を読み、作っていく、その時にその座の底にながれている信頼関係・共同意識を連衆心というのだと思う」と付け加えてまとめにした。連句を心理療法に応用している実践(『俳句・連句療法』徳田良仁監修 飯森真喜雄・浅野欣也編)もあるが、連句の実作はある意味で生徒の心の交流を培う学習でもありそうだ。

(3) 発句の鑑賞と脇句の実際と考察 (→資料4参照)

③の「春の日や」の句を選んだグループはなかった。女子生徒の多い本校の実情から理解されやすいのではないかと思い選んだ句であったが、二クラス実践してともに選んだ生徒がゼロというのは、「風より軽き」の主観性の強さが脇を誘いにくかったのであろうか。どんな句を発句にするか、ということは今後の大きな課題の一つである(生徒自身の句を発句にすることも含めて)。

① 「卒業の面をあげてうたふなり 草野梨迂子」の句

○初読の際、「面をあげて」の意味が質問に出た。

○実践がちょうど三月であり、卒業をテーマにしたこの句は生徒たちの心をとらえやすかったのであろう。この句に脇を添えようとした生徒が最も多かった。発句の鑑賞としては、

- ・涙がこぼれないように上を向いているのだ。
- ・悲しいけれど未来へ向かって顔をあげて歌うのだ。
- ・押し寄せてくる思い出をじっとこらえているのだと思う。

など、身近な卒業式をイメージしつつ、卒業歌を歌っている人物の心情を具体的に想像していた。その脇句には、

〈脇〉ア 涙あふれる友と巣立つ日
イ あふれる涙そのままにして
ウ 窓の外には満開の梅

ア、イのように歌っている人物の姿を鮮明にしようとするものと、ウのように卒業式の会場の様子やあたりの景色を付けようとしているものが出た。

②「春の雲ながめてをればうごきけり 日野草城」の句

○日野草城は昭和 21 年から病床で作句したが、それを生徒たちに説明せずに句に向かわせた。それは句の言葉だけをたよりに、自由に想像させようとしたからである。

○句の雰囲気から、ほとんどの生徒が空を眺めている場所は「野原」であると考えていた。

- ・あたたかくなった草を背中に感じて……。
- ・野に転がって空を眺めていると……。
- ・雲を眺めているとその雲が思い出深い顔になって……。

そして脇句には例えば、

〈脇〉ア 草のにほひと陽の優しさよ

イ 青草ゆれて時が過ぎてく

など、そのあたりの様子を具体的に想像しているものが多かった。アについては、「(発句は) 春の空にばかりと浮かぶ雲をぼんやりと見ていると、ゆるやかに動いていた。(という句。そこで) とてもおだやかでぼかぼかしている野原。そよ風に草のにおいが混じっている(様子を付けた。)」と自解している。視覚でとらえた発句の景色に対して、「草のにほひ」という嗅覚と、「陽のやさしさ」という触覚で答えたわけで、この生徒が草城の句を味わい、五感で感じるほどにイメージを具体的なものに行っていることがそのまま付句になったとみてよいだろう。発句の読みに主体的に関わって、文学的虚構世界を創造する、まさに理解と表現の一体化した学習活動が行われたとしてよいのではないだろうか。連句の実作をとおして、こうした読みを育てられる可能性は非常に高いように思う。

ここで、今回のように俳句を発句として脇起こしを行うとき、その扱い方にひとつの問題(課題)が生まれる。つまり、近・現代の俳句は写実性が強く、その結果、鑑賞においても作者の状況(製作時の状況)が重要になる場合があるが、連句はそれに対して前句の読みを支えにして文学的虚構の世界を作っていくという性質の強いものであるということである。連句においては、通常発句と脇はその場の現実を切り取って挨拶を交わす形が多いといえるだろうが、今回のような脇起こしでは脇を作る者は発句の製作の現場にいないわけだから、当然虚構としての脇に傾くのである。

草城の句についても「春の雲」を眺めているのは、屋外なのか、病床なのか、それによっても鑑賞はずいぶん変わってくる。今回は草城の句の鑑賞が目的ではなく自由に想像して付句を作ることが主なのであえて解説を省いたが、たとえば俳句の授業で数時間鑑賞を行った後に、その中から発句を選んで連句を巻くような扱いなら、発句の成立の状況なども知った上で脇を付けることもできよう。発句をどう鑑賞させるか、句の言葉だけから自由に読ませるか、句の製作の状況に沿って読ませるべきなのか。これは実は連句の発句の扱っただけでなく、俳句鑑賞の授業でも同じことであろうが、ここでも課題がまた一つ明らかになってきた。

(4) 生徒たちの付合の実際と考察 (→資料 5, 参照)

連句の授業中、どのグループもたいへん楽しそうに取り組んでいた。次に生徒たちの付合の実際をいくつか例をあげてみてみたい。

資料4 脇を作る

<p>2 (春)</p> <p>前句は卒業という悲しい別れがやがてきたがその悲しみをとどめて顔あげて歌おう。明日という未来の為に</p>	<p>1</p> <p>発句 卒業の面をあげてうたふなり 草野梨迂子</p> <p>自分の句案・ただひどすぎの涙ほおを伝わり</p> <p>治定句・流れる涙そのままにして(寛美)</p>
--	---

通句を案じよう
『道句を作ってみよう』 2年尺組 34番
氏名(菅野梨迂子)

<p>2 (春)</p> <p>前句は卒業の悲しさをふきとばすように、思い切り声をあげて胸をぼてうたう様子。</p>	<p>1</p> <p>発句 卒業の面をあげてうたふなり 草野梨迂子</p> <p>自分の句案・心にしめる親友のうたごえ</p> <p>治定句・ながれる涙そのままにして(寛美)</p>
--	--

通句を案じよう
『道句を作ってみよう』 2年尺組 41番
氏名(菅野梨迂子)

<p>2 (春)</p> <p>前句は卒業式で、ふらふらな想いがおぼしよせてくるのをこらえて涙をあげて歌おう。</p>	<p>1</p> <p>発句 卒業の面をあげてうたふなり</p> <p>自分の句案・夜と別れ悲しみを胸に</p> <p>治定句・流れる涙そのままにして</p>
---	---

通句を案じよう
『道句を作ってみよう』 2年尺組 39番
氏名(神畑優子)

<p>2 (春)</p> <p>前句は卒業式で元氣よく前をむいてうたう</p>	<p>1</p> <p>発句 卒業の面をあげてうたふなり</p> <p>自分の句案・思いあふれて涙するかな</p> <p>治定句・流れる涙そのままにして</p>
---	--

通句を案じよう
『道句を作ってみよう』 2年尺組 22番
氏名(清水花枝)

いっしょをむいて歌っているか涙をこらえて思い出さかみしめのか
いっしょ

連句を楽しもう

2年R組 6番

「連句を作ってみよう」

氏名(沼田 里代)

1	発句 春の雲ながめておればうごきけり
2 (答)	自分の句案・北り中の下のロープもただたかき 治定句・草のにはひと陽の優しさを 瑠璃 前句は 野原のようなきところ と、空の雲まななめて いるところを想像した そこで 春にちか、気温と ともにあたたかくなた 草は、北風で感じてい るところを想像した

連句を楽しもう

2年R組 36番

「連句を作ってみよう」

氏名(橋元 裕子)

1	発句 春の雲ながめておればうごきけり
2 (答)	自分の句案・草のにはひと陽の優しさよ 治定句・草のにはひと陽の優しさよ 前句は 春の柔らかなさうな 雲をぼんやり見ていると ゆるやかに動いていた。 そこで 野にころかっていたの で、草の香りが伝わってき 優しい光が私にふりそそ いでいました。

連句を楽しもう

2年R組 7番

「連句を作ってみよう」

氏名(鳴野 麻里子)

1	発句 春の雲ながめておればうごきけり
2 (答)	自分の句案・風きややと我入髪ゆるりず 治定句・草のにはひと陽のやさしさよ (瑠璃) 前句は 春、そして雲が動いている そこで きつとさわやかな風が 吹いてくるのだろう 気持ちよさそう

連句を楽しもう

2年R組 27番

「連句を作ってみよう」

氏名(栗原 明子)

1	発句 春の雲ながめておればうごきけり
2 (答)	自分の句案・日々も過ぎさり思ひ出、残る 治定句・草のにはひと陽の優しさよ 前句は 春の空の雲がうごいて 自分の前を過ぎ去っていて いる そこで 自分の中でも、もう 季節は新しいものになっ ている。新学期も始ま る。おもい出は残っている。

① 付け筋の面から

付け筋の面から生徒たちの作品を見てみると、次のようなパターンが見られる。

ア 前句の場面の様子(情景, 心情)だけでなく, 雰囲気までよくイメージ化している付合。

例1 雪降れどにぎわう街のあたたかさ 橋本

希望託して大空舞う風 金子

ここでは, 買い物の人でにぎわう師走の街の様子に, 風があがっている空の風景をつけ加えた付けになっているが, 前句の雰囲気までしっかりとらえイメージした結果が(「希望」という直接的な表現ではあるが)付句に反映している。「にぎわう街のあたたかさ」は人が生きていることそのもののぬくもりを中学生なりにとらえている句である。それが「希望託して」につながったのであろう。

イ 前句の様子をさらに具体的に思い浮かべている付合。

例2 ひとすじの朝露ひかる紫陽花よ 菅野

葉に一匹のかたつむりかな 興芝

例3 月の夜オオカミ男現れて (T)

子の歓声でショーは始まる 林

ともに前句の場面を具体的に想像し, その場の様子を描き出した付合である。例2は美しい朝の紫陽花をクローズアップして, 葉の上のかたつむりを描き出している。「紫陽花→かたつむり」という言葉の連想もあろう。例3は, オオカミ男が現れたという前句を子ども向けのショーの場面と見立てて, 会場の子どもの歓声を付けているのである。

生徒たちの付合を見ていて, 最も多いのがこのパターンである。例2などは, 本来の連句の運びから言えば, 付けすぎといわれるところであらう。しかし, 前句から具体的なイメージを作り, それを広げて想像の世界を作り出している」という意味で, 今回のねらいに沿った付合だと考えた。

ウ 前句の語句からの単純な連想。

例4 草のにはひと陽のやさしさよ

そよ風に花のかおりを運ばせて 田草川

一人風月なびく髪なし 松岡

「そよ風」からグループ内の友達の髪形を連想しただけの付合である。できるだけ, 例1~3のような付合に発展させたいが, 最初の段階ではある程度仕方がないところであらう。

② 句の「人情」と「視点」について

次に句の「人情」についてふれておきたい。「人情」とは一句の中に人間が詠まれているか(人情あり), それとも景色など人間が出てこない句か(人情なし)ということである。そして「人情あり」の句はさらに, 人情自, 人情他, 人情自他半に分かれる。

人情自: 句の語り手自身の行動や思いが語られているもので, 「一句の視点が作中人物の主体性におかれ(中略)作中人物の視点に立って行為主体を自分とし, 関係する人物も自分一人と限った」ものである(『連句辞典』前出)。

人情他：「作中人物としての自分に視点が設定されたとき、自分以外の他人や他人の行為を表現した」句である(同)。

人情自他半：「人情自と人情他が一句中に詠み込まれていること」をいう(同)。例えば、「花守に花の短冊望まれて」という句では、花守(他)に自分(自)が短冊を求められるのであって、自分と他人が一句中に関わっている。こうした句を自他半という。

という具合であるが、生徒たちの付合に例を求めると、例えば先に示した例3の部分だが、次のようになっている。

ア 月の夜オオカミ男現れて (T) ……他(場)

イ 子の歓声でショーは始まる 林……他

ウ 雪の日はこたつとみかんちゃんちゃんこ 小溝……自

人情はそもそも立花北枝が考案した三句の転じ方であり、打越(一句飛んで前。ウ句に対してアが打越句)と人情を変えることで転じの変化を生み出そうとしたものである。

この例で、イはオオカミ男のショーの一場面ととらえた句作りであり、ウは「ショー」をテレビ番組として子どもたちといっしょにテレビを見ながらみかんを食べるちゃんちゃんこの人物(行為主体)を描いているのである。そしてイが客観的な視点であるのに対して、ウでは視点が行為主体であるちゃんちゃんこの人物にぐっと寄り添っているともいえよう。

この三句の展開は、前句のとらえ直すと、人情・視点の変化によってたいへん面白くなった。実は今回の授業では人情については何もふれなかったのであるが、この「人情」をもう少し意識して句作させるようにすると、付合自体が面白いものになると同時に、文学における「視点」について、意識を高めることができるのではなかろうか。

4. まとめと今後の課題

楽しそうに連句に取り組む生徒たちを見ていると、それだけでも教材としての連句の魅力を感じる。生徒たちの付合の例を見ながら、連句の授業の課題もいくつか明らかになってきた。最後にそれらを整理して、今後の課題としたい。

(1) 生徒たちの感想から

まず、授業後の生徒の感想を整理してみる。

① 連句をやってみて(とても楽しい 29, まあまあ 31, あまり面白くない 4, つまらない 0/65)

<楽しい, まあまあ>

- ・いろいろな場面を想像しながらやったのが楽しかった。
- ・みんなで作るのには驚きもあり楽しい。
- ・自由に創造できて楽しかった。
- ・一つのことからいろいろ考えられ、それが発展していくことが面白い。
- ・短歌や俳句は苦手だが、みんなの歌(句)がつながっていくと面白い。
- ・普段照れていえないようなことも句の中だといえる。
- ・良い句ができず採用されなかったりもしたが、いろいろアイデアが出て楽しかった。

資料5 作品例1・2・3・4

国語学習資料(H4.3ノ) 2年 尺組氏名(銀芝如寿世)
連句を楽しもう!

一座のメンバー
友泉 菅野
沙希 与芝
白蘭 菊池

「卒業の」の巻(十二題)

発長 卒業の面をあげてうたふなり 草野 春
作者 梨辻子

脇短 よかれる涙そのまににして (宴美) 春

3長 花の香に誘われ歩くふるさとの道 (沙希) 春 [花]

4短 幼き頃をふりかえりみて (白蘭) 雑

5長 ひとすべの朝露ひかる 深陽花よ (友泉) 夏

6短 葉に一匹のかがつかりかな (沙希) 雑

7長 夕焼けか 秋 ^{えん} ^{えん} 色に染めあがる 白蘭 秋 [恋]

8短 恋の終わりは花散るようじ (友泉) 秋 [恋]

9長 夜をふけて月を見上げて涙む (沙希) 秋 [月]

10短 いにしめる 親友 ^{よも} のやま ^れ 白蘭 雑

11長 いつまでも 定ちと照らす雪あ (友泉) 冬 [雪]

挙短 わが家の愛につつまれながら (沙希) 冬

※ 季節の指定は「できれば」ということ。あまり気にしないで、自由に連想をふくらませてみよう。字あまり字足らず気にせずに「後から推敲すればよい。」

国語学習資料(H4.3ノ) 2年 藤組氏名(版部 瑞穂)
連句を楽しもう!

一座のメンバー
寿来 (寿来さん)
奈留 (奈留さん)
宴美 (宴美)

「卒業の」の巻(十二題)

発長 卒業の面をあげてうたふなり (梨辻子) 春
作者

脇短 流れる涙 そのまににして (宴美) 春

3長 夜桜の散るが心にまじまされて (寿来) 春 [花]

4短 思い出すのは 怪談話 (奈留) 雑

5長 夏の晩 いたる汗がひとすく (宴美) 夏

6短 庭ではびこは Tシャツの波 (寿来) 雑

7長 秋の雲 彼方へ消える 彼の声 (寿来) 秋 [恋]

8短 心に染める 秋風の音 (奈留) 秋 [恋]

9長 三月の欠けたる破片 風運ぶ (奈留) 秋 [月]

10短 髪かき乱し 人を怒らす (寿来) 雑

11長 冬の朝 雪合戦で びりりられ (奈留) 冬 [雪]

挙短 さいわい景色は 銀世界たり (宴美) 冬

※ 季節の指定は「できれば」ということ。あまり気にしないで、自由に連想をふくらませてみよう。字あまり字足らず気にせずに「後から推敲すればよい。」

国語学資料(日4.3ノ)

2年R組氏名(植木 楽)

連句を楽しもう!

一座のメンバー

「春の雲」の巻(十二題)

発長 春の雲ながめてをればうごきけり

(目野 英敏 春)

脇題 草のほびと陽の優しよ

(瑠璃) 春

3長 窓ぎわでうつらうつらと花のゆめ

(波斗) 春(花)

4題 まなこあぐれば師は怒りけり

(湖葉) 雑

5長 花火見そかき頃を思ひ出す

(楽玩) 夏

6題 友と遊びて転んだ痛み

(瑠璃) 雑

7長 もみが葉のやうに燃え立つ秋か

(湖葉) 秋(恋)

8題 ぶどうの房に涙こぼれて

(波斗) 秋(恋)

9長 月の夜にすすきも風はふるえてる

(楽玩) 秋(月)

10題 野に響きゆく銀の歌声

(湖葉) 雑

11長 雪降れどにきわう街のあはれか

(瑠璃) 冬(雪)

挙題 希望託して大空舞う風

(波斗) 冬

※ 季節の指定は「でまねは」ということ。あまり気にしないで、自由に連想をふくらませてみよう。字あまり字足らず気にせず「後から推敲すればよい」。

国語学資料(日4.3ノ)

2年R組氏名(林 哲平)

連句を楽しもう!

一座のメンバー

「の巻」(十二題)

発長 春の雲ながめてをればうごきけり

(目野 英敏 春)

脇題 青草ゆれて時が過ぎゆく

(楽玩) 春

3長 花の中女子大はは袴着て

(ミサキ) 春(花)

4題 車かたはらば正門の前

(凡人) 雑

5長 高速は渋滞海はまた遠く

(雅辺) 夏

6題 いくつ教えるほそきためいき

(ミサキ) 雑

7長 胸にひめ言うに言われぬこの思い

(凡人) 秋(恋)

8題 バットで壊した菊の鉢植え

(ミサキ) 秋(恋)

9長 月の夜オオカミ男現れて

(雅辺) 秋(月)

10題 子の歌声でシロは始まる

(凡人) 雑

11長 雪の日はこたつとみかんちゃん

(ミサキ) 冬(雪)

挙題 みんころろて除夜の鐘聞か

(凡人) 冬

※ 季節の指定は「でまねは」ということ。あまり気にしないで、自由に連想をふくらませてみよう。字あまり字足らず気にせず「後から推敲すればよい」。

連句を楽しもう
 『 春の雲 』
 2年級 豊
 の巻 氏名(小溝隆裕)

○自分たちの作品をまとめてみよう。

<p>1 発句 春り雲 けかりしを水ぼうこさけり (日野草城)</p> <p>2 発句は ぬ青草ゆり水けり時がすきゆく (葉生)</p>	<p>3 前句は 五月平やゆりといふ けりかすきゆく 卒業式 春の終わり 卒業式</p> <p>4 前句は 女子大生が卒業木下 といえはかならず彼か 下へくる</p>	<p>5 前句は 車かななり 正門の 前だからその車かなら ぶというところだけと</p> <p>6 前句は 海口すに遠いしおも 高直は装束しては車 日付かながすきくな</p>	<p>そこで 月野草城</p>	<p>そこで 葉生</p>	<p>そこで 日野草城</p>	<p>そこで 葉生</p>	<p>そこで 日野草城</p>	<p>そこで 葉生</p>	<p>そこで 日野草城</p>
--	---	---	-----------------	---------------	-----------------	---------------	-----------------	---------------	-----------------

<p>7 前句は いくつ教える 胸にひめめ言うに言われぬ 想い (凡人)</p>	<p>8 前句は 胸にひめめ言うに言われぬ 想い (凡人)</p>	<p>9 前句は 前日 月夜に オオカミ男 ありわ水 (雅辺)</p>	<p>10 前句は 前日 月夜に オオカミ男 ありわ水 (雅辺)</p>	<p>11 前句は この 散声に ショ 始まる (凡人)</p>	<p>12 前句は 雪の日 除夜に 鐘を聞く (凡人)</p>	<p>そこで 月野草城</p>	<p>そこで 葉生</p>	<p>そこで 日野草城</p>	<p>そこで 葉生</p>	<p>そこで 日野草城</p>	<p>そこで 葉生</p>	<p>そこで 日野草城</p>	<p>そこで 葉生</p>
--	-----------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	----------------------------------	---------------------------------	-----------------	---------------	-----------------	---------------	-----------------	---------------	-----------------	---------------

〈あまり楽しくなかった〉

- ・ (付句が) あまり思いつかなかった。
- ・ 私の作りたいイメージと人の意見が合わなかったりした。
- ・ 脇句をやったときのようにみんなで作って、一つ選ぶやり方のほうがよい。

② ためになったこと (役立ちそうなこと)

◎想像力がつくと思います。

◎情景や気持ちを短時間で想像したり作り出すことができるようになる。

- ・ 和歌を読んだときにいろいろなイメージが広がりそう。
- ・ 句を読み取る力がつく。

◎表現の仕方を一所懸命考えるから、いろいろな表現の仕方を覚える。

◎言いたいことの要点をうまくまとめられるようになる。

- ・ かなづかいなど感じを出すために工夫できるようになる。

◎季節に敏感になる。

◎俳句や短歌に親しみが持てた。

- ・ 言葉の選び方が少しはうまくなりそう。

③ 自由な感想

- ・ 今度やるときは歳時記を手もとにおいておくべきだ。
- ・ いろいろな作品をみてみたい。(昔のもの)
- ・ かなりよく考えた。そうしないと気に入ってもらえる句ができないし、採用してもらえないからです。
- ・ 日本の文化にこのようなものがあるというのがとてもうれしい気がします。
- ・ 思いどおりに自分の言葉で表現するのが難しかったです。
- ・ 発句から全部自分一人でやってみるのも面白いと思った。
- ・ 興奮してしまった。友達の発想が豊かで感心した。
- ・ 初めてということで緊張したけど、とても楽しくてしかもちゃんと国語の勉強になっているのですごいと思った。
- ・ 言葉が足りないことをあらためて感じさせられた。連句は言葉が豊富だともっと楽しいものだった。
- ・ 拳句が完成したときの感動は忘れられません。
- ・ 難しくてなかなか思いつかなかった。

これらの声からも楽しめた様子が伝わってくるが、「楽しくてしかもちゃんと国語の勉強に……」「言葉が足りない……」など、遊びながらも国語教材としての連句の価値に生徒たち自身が気づいていることにも注目させられた。

(2) 今後の課題

さて、課題として見えてきたものを整理し直してみたい。

① 発句の選定と、その読み取り

生徒たちに提出する発句をどのように選ぶか。また、句の成立の事情に沿った読みと、言葉を

便りに自由に想像して読む読みとをどうこなしていくか。俳句の読みの指導とも関連して、脇句を作る場面について、他の付句とは違った配慮・目標が必要になりそうである。

② 表現に根ざした前句の読みの指導と、付句の指導（視点にふれて）

「前句のどこから」を問うことによって、選び抜かれた言葉にこだわる読みを身につけさせたい。そして語の内包するイメージを豊かに膨らませていくことにより、付け筋を見いだしていくように指導していくとよいのではないだろうか。

そしてその際、句の「人情」を工夫することを通して、視点を意識していけるようになると、より具体的なイメージを自覚的に作りあげていけるのではないだろうか。やや高度とも思われる内容だけに、どの段階からどのような形で教室に取り入れていくか、指導過程の問題とも絡めて工夫したい。

③ 発達段階、他の単元・教材との指導の系統

今回は2年と3年で実際に創作してみたが1年生ではどうなのか。また古典単元や詩の指導との系統性をどう考えて位置づけていけばよいのか。また、語彙指導の視点からもアプローチが可能であろう。

④ 指導内容の構造の整理と評価の観点

②とも関係が深いが、例えば前句を解釈し鑑賞する力と、それを付句に表現するのはもちろん全く別の力である。発達段階、指導の段階も考慮しながら、どの活動がどんな力に結びついているのか。また、それをどう評価するのか。指導目標・内容の構造化を研究したい。

連句は、理解と表現の一体化した活動の中で創造的な〈よみ〉を育てる国語教材として、言葉の力を育てる国語の教材として、多くの魅力をもっている。このような課題について、今後はさらに実践を重ねる中から、一つ一つ考えていってみたいと考えている。

<主な参考文献>

- 『連句入門 芭蕉の俳諧に即して』東 明雅（中公新書）
- 『連句への招待』乾 裕幸・白石悌三（和泉書院）
- 『連句辞典』東 明雅・杉内徒司・大畑健治（東京堂出版）
- 『展望俳諧の文芸』榎坂浩尚・桜井武次郎（双文社出版）
- 『俳諧七部集芭蕉連句全注解』伊藤月草（河出書房）
- 『電腦連句で遊ぶ』林 義雄・辻アンナ（三省堂）
- 『連詩の愉しみ』大岡 信（岩波書店）